

## 東京慈恵医院医学校交友会，その誕生と挫折

—— 交友会委員 吉崎薫一の場合 ——

誰の人生にもあまり陽のあたらない出来事があるように、わが慈恵医大の歴史にもそのような類の出来事がいくつかあるようである。ここに述べる東京慈恵医院医学校（以後慈恵医学校）交友会の解散事件もその一つであろう。ただ問題なのは、この事件に陽をあててその全容を描こうとしても、時代があまりにも古く、当時の人々はもう完全に世を去っており、物的資料ももうほとんど消滅していることである。東京慈恵会医科大学八十五年史<sup>1)</sup>にそのような事実があったことがわずかに書かれているのみである。筆者はここに吉崎薫一という当時この事件に関係のあった学生の履歴をわずかに知っているのので、そのわずかな資料を基にして、飛び石を飛ぶようにその全体像に迫ってみたいのである。飛び石の距離があまりにも遠く、実像から若干違った像を描くことになるかもしれないが、飛び石の数に免じて許していただきたい。

ここにいう慈恵医学校交友会とは、同医学校の学生が創立以来初めてつくった（今日的意味での）自治会のことである。明治34年（1901、医学専門学校になる2年前）に、大きな希望と期待のもとに誕生したのであるが、学校側との意見が対立したまま、わずか二年で解散に追い込まれている。

明治34年といえば、同医学校は創立以来既に20年を経過し、内外ともに高い評価を受けていた時期である。他の私立医学校の多くはその頃既に経済的破綻から次々と廃校になりつつあった（最も華々しい存在であった済生学舎でさえ同36年には同じ理由で閉鎖している）。慈恵医学校の隆盛は、一つには皇后陛下のご眷護の下にあった東京慈恵医院と高木兼寛校長の個人病院（東京病院）の経済的援助があったからだといわれている。同医学校が同36

年、他の医学校を尻目にほとんど無審査で医学専門学校に昇格できたのも、このような経済的基盤を背景にした設備，教授陣が群を抜いていたためと思われる<sup>2)</sup>。この頃、高木校長の心身状態も極めて良好であった。東京慈恵医院(施療病院)は皇室の援助もあり、さしたる心配もなくなったし、彼の学者生命を賭けた脚気論争も彼の勝利のうちに終わりつつあった。すでに彼の関心は医学校での教育にあり、彼独自の強固な主義方針に従って医学生への教育に専念したいと思っていた(自分で設立し、自分で運営している学校である、誰にも遠慮する必要はなかった)。今日まで残っている高木校長の厳格を極めた教育逸話はそのほとんどがこの明治30年代のものである。

慈恵医学校はその頃乙種医学校といわれ、学生は卒業しただけでは医師になれず、大政官の医術開業試験に合格しなければならなかった。そのため同校の学生には一種の予備校的気風がながれ、学生数の少ないことも相まって互いに親睦することが難しかった。しかし、明治30年代になると次第に学生数も増加し、それにとまって文芸、スポーツなどの趣味の合う者同士が集まり、一種の部活動ができるようになったらしい。ただ、学生側の意向と校長の意向とが必ずしも一致するとは限らなかった。例えばその頃、部活動の一団は時のドイツ医学尊崇の風に刺激されて、ドイツ語教師を招じてドイツ語の講習会を開いたが、高木校長はこれを知り、「英語は世界語であるから、まずこれを習熟せねばならぬ。ドイツの優れた業績は直ちに英訳されて普及するから、英語のほかにドイツ語を学ぶ必要はない」として、講習会の校舎使用を禁止している。そしてこの風潮に対抗するかのようになり、明治32年からカリキュラムに英語科を強化し、外人英語教師を招聘している。ただ、学生のスポーツに対してはその重要性を認め、明治32年から体操科を正科に加え、陸軍特務曹長と陸軍一等軍曹とを教員にむかえている(何となく学生と校長の感覚の違いは感じられるが)。体操は兵式体操に校長独自の工夫を加味したもので、翌33年の卒業式から宮妃殿下を始めとする来賓の観覧に供されたという。

明治33年(1900)9月の新学期からは初めて学生全体を網羅した親睦会が

つくられ、交友会という名称で毎月会合が開かれるようになった。この交友会は雑誌「エム・エス」を編集し、翌34年1月から季刊として発行している（Medical Schoolのイニシアル、M.S.をそのまま雑誌名にした）。そしてこの雑誌の刊行を機に交友会は一応学校の公認された形になった。委員は関口福三郎以下、柿本庄六、神谷寿資、永田熊太郎、小出虎之助、橋本良三、小川宗七、木内豊蔵、桑田志一、山賀州介、小笠原光精、佐藤幹治らの12名であった。当時の〔慈恵医学校交友会規則〕をみると、その行事としては、1) 常に運動を励行し毎年秋期大運動会を催すこと、2) 運動チームとして〈バスケットボール〉〈フットボール〉を結成し、その必要器具を揃えること、3) 毎月一回例会を開き本校講師ないし先輩から講話を聞くこと、また会員は各自の説を述べ或いは討論すること、4) 機関誌として「エム・エス」を発行し会員に配布すること、などが書かれている。その機関誌「エム・エス」は、内容として講師の講義筆記、先輩・同輩の臨床経験、学生の主張、希望、文芸、時事などを収録していた。

翌34年の新学期から交友会は自治的傾向を一層強め委員の大半を交替した。すなわち新委員は吉崎薫一以下、金川才次郎、橋本良三、桑田志一、高橋百太郎、江村悌造、藤島源造、鈴木右吉、佐藤幹治、木下一雨、尾藤釧三郎、岡島太郎らの12名である。ここで初めて委員長格の吉崎薫一なる人物が登場してくる。この新委員会によって編集された機関誌第5号はその名も「交友会雑誌」と改められ、明治35年1月に発行されている。発行責任も東京慈恵医院医学校交友会と表紙に明記された。おそらく中身も相当変わったのであろう。

事件はまず高木校長がこの雑誌を一読し、直ちに発行休止を命じたところから始まった。現在この雑誌を直接手にとることの出来ない筆者としては何とも論評し難いところであるが、校長はこの中の何か“自由”とか“民権”とかいった論説に目がとまり反射的に危険を感じたのではないかと思われる。委員会としてはこの雑誌の前途を心算かに期待していただけに、校長から休刊を命ぜられた苦痛は想像以上であつたらしい。10ヵ月後の復刊号（通算第6号）にはその心情を“半年有余の長きに亘りて休刊を断行し、本会が期する

目的の一部も杜絶せしやを重ねて推問あらざらん事を希望す。此の苦痛を忍び蜚ばず鳴かざるもの、白昼実に語るに堪えざる処であった”と表現している<sup>1)</sup>。校長は[校友会雑誌]第5号を見た時点で校友会の解散を決意したと思われるが、実際にはその時期を慈恵医学校が医学専門学校に昇格する翌36年6月まで延期した。解散理由は新しい医学専門学校には校友会は置かないということであった。そして“雑誌の発行がもし必要ならば、すでに成医会月報(慈恵の学会誌)があるではないか”と論している(ここにも両者間の感覚の違いがみえる)。委員会は断腸の思いで「校友会解散顛末報告書」を配布して解散した。「校友会雑誌」も自然廃刊となった。

吉崎薫一は退学した。そして医術開業試験に合格し、広島に帰郷した。委員12名のうち卒業名簿に名を連ねているのは5名だけであるから<sup>3)</sup>、他の7名もおそらく吉崎と同じ運命を辿ったものと思われる。吉崎のその後の生き方については後で述べる。

高木校長もこの事件については感ずるところが多かつたらしい。その後は彼らしい体育、徳育の涵養になお一層精力を傾けていくのである。“(麦飯)弁当点検”，“服装点検”など後々の語り草になるものはほとんどこの頃のものである。学生と一緒に明徳会なる修養団体をつくり名僧高德の修養講話を聞き始めたのもこの頃である<sup>1)4)5)</sup>。この種の教育を当時の学生がどのように受けとったかは別にして、彼の教育に対する真摯な熱意と行動力に対しては同じ教育者としてやはり脱帽せざるをえないのである。そしてもう一つここに強調しておきたいことは、今日、慈恵医大の伝統といわれているものの中に、その源流は高木兼寛の人格にありながら、この校友会事件にみるように学生とのかかわりにおいて発展してきたものも多いことである。その点から言えば、この事件を契機に慈恵を去った学生も、この大学の伝統形成に精いっぱい貢献したという意味で、その名誉を回復してもよいのではないだろうか。

さて吉崎薫一のことである。筆者がここに考察したいのは彼の思想的背景と校友会事件との関係である。吉崎は明治12年に広島の医を業とする家に生

まれている(代々藩主浅野侯の侍医であったといわれる)。生来明朗潤達な性格であつたらしい。中学卒業後、鎌倉在住の叔父・清川来吉(清川病院長、初代鎌倉市長)をたよって上京し(明治31年頃)、神田に下宿しながら慈恵医学校に通学した。彼の思想的背景を考察する場合、どうしてもこの神田の下宿における交遊関係を無視することは出来ない。とくにこの時期の孫文との出会いは彼の人生を大きく変えたように思われる。

今日、中国の国父と呼ばれている孫文(1866-1925)も、その頃は革命(1895年の広州の蜂起)に失敗し、日本に亡命していたのである。彼は神田の隠れ屋に住居を構え、次の活動の準備を進めていた(この亡命期間は外国への出入りはあるが、明治29年から38年までである)。面白いことに、吉崎は偶然のことであるがこの孫文の隠れ屋に下宿したらしい。この時期、孫文は犬養毅、大隈重信らの大物政治家との接触にも努力したが、若い中国人留学生や日本人学生との交遊にも多くの時間を費やした。革新的民主主義者・宮崎民蔵や寅蔵と深い友情を結んだのもこの時期である<sup>9)</sup>。吉崎も若年ながらこれらの多くの人々と知己になったはずである。孫文の思想をここに述べる余裕はないが、彼が自伝の中で述べている“私は清仏戦争に敗北した年から清朝を倒し民衆のための国をたてようと決心した。それ以後、学校を宣伝の場とし、医術を生活の手段とした”という言葉の中に彼の思想が最もよく表れているように思われる。

吉崎をさらに孫文に近づけさせたのは孫文自身がいま述べたように医師であつたことである。若き日、西医書院(現・香港大学医学部)で英国医学を学び(抜群の成績で)ドクターの称号をもらって卒業している。一時マカオで外科を開業したが、医学で民衆を救済することには限界があることを感じ、社会運動家に転向したといわれている。孫文も吉崎の中にかつての自分を写しながら、先輩として広く国際的に生きることを勧めたのかも知れない。吉崎は後年、子供たちを前に、若いころ孫文に大変親しくしてもらったことを何時も自慢げに話したといわれる。おそらく彼にとっては孫文は偉大な存在であつたのであろう。

とにかく、彼はこのような思想の影響のもとに校友会の活動、とくに雑誌

の編集に参加し，これが高木校長の忌避に触れたものと思われる。(余談であるが，吉崎の没後吉崎家では，“吉崎薫一は共産主義の運動で慈恵を追われたらしい”と伝えられているが，これは当たっていない。日本における共産主義思想は大正末からであり，吉崎が在学した明治にはまだその兆候はなかった。)

広島に帰った吉崎は結婚し，しばらく医業に従事したのち，明治38年米国に渡り，シカゴの医学校(現・シカゴ大学医学部)に入学した。彼はそこで本格的に医学の勉強をし直し，首席の成績で(ドクターの称号をもらって)卒業した(吉崎家にはその賞状と記念品が今でも大切に保存されている)。明治42年に帰国したが，その帰途英国を旅している。彼には英国の医学のみならず，その風土ぜんたいが大変好ましく写ったらしい。帰国後生まれた女兒に英子と命名しているほどである(野間英子氏談)。そのような意味では彼もまた高木校長の忠実な弟子であったわけである。帰国後，呉で開業し，大正13年そこで没するまで，多くの患者のために尽くした。彼は自分がドクターであることをひそかにプライドにしていたらしく，“広島県には医学士(ドクター)は4人しかいない”と自慢したことがあったという(当時は東大など二，三の帝国大学を卒業した医学士と欧米の大学を卒業したドクターとを同等にみる風があった<sup>2)</sup>)。これも吉崎の一面であろう。

彼には交友会事件がよほどこたえたらしく，子供の進学に際して，私学に進むことを絶対に許さなかった。そしてこの家訓は孫の代まで続いた。ところが曾孫の代になって，泉下の吉崎薫一の意志も大分軟化したらしく，曾孫の一人が慈恵医大(昭和62年)に入学している。現在の慈恵医大なら許せると思ったのであろうか。



吉崎薫一(1879-1924)  
シカゴ医学校卒業時のガウン姿

今にして思えば、この慈恵医学校校友会が憧れた学生の自由とか自治とかいった思想はいずれ禁圧される運命にあった。その一年先の明治37年には日露戦争が待っていたのである。

#### 文 献

- 1) 東京慈恵会医科大学八十五年史，東京慈恵会医科大学，東京，1965.
- 2) 酒井シズ：日本の医療史。東京書籍，東京，1982.
- 3) 86' 会員名簿。東京慈恵会医科大学同窓会，東京，1986.
- 4) 東京慈恵会医科大学百年史。東京慈恵会医科大学，東京，1980.
- 5) 高木兼寛伝。東京慈恵会医科大学創立八十五年記念事業委員会，東京，1965.
- 6) 横山 英，中山義弘：孫文。清水書院，東京，1987.